

東海学院大学・東海学院大学短期大学部公開講座 2020

「考えて生きる ～大学は知の宝庫～」

第5回 11/13 (金) 13:30～15:00 報告

活字！を考える ～大学は知の宝庫～

講師 アンドリュー・デュアー (本学教授) 於：図書館大セミナー室

◆◆◆◆◆◆◆*◆◆◆◆*◆◆◆◆*◆◆◆◆*◆◆◆◆*◆◆◆◆*◆◆◆◆*

令和2年度第5回公開講座(受講者26名)が11月13日に開催されました。今回の講師は、本学図書館長でもあるアンドリュー・デュアー先生です。デュアー先生は、「活字！を考える」と題して、東西の文明と科学技術の発展に寄与した「活字」の発明・普及のプロセスについて、たくさんの写真を紹介しながら講演されました。

1620年にイギリスの哲学者フランシス・ベーコンにより発表された哲学の著作『ノヴム・オルガヌム』には、世界を大きく変えた発明について書かれています。それは、火薬、羅針盤、そして印刷技術です。印刷は大きく世界を変えました。人類の歴史を遡ると、文字そのものは約5300年前に発明されました。エジプトの象形文字は皆さん、ご存じでしょう。当時から知識を蓄積することは出来ました。しかし、知識を広めることはなかなかできませんでした。本が手に入らなければ読むことができませんので、ヨーロッパでは、文盲が少なくありませんでした。長らく世の中の「なぜ？」は“神様のなさること”で説明されてきましたが、知識の蓄積、教育の普及により、科学革命へと社会は発展してゆきました。科学によって「予測」が出来るようになります。それゆえ様々な意見がぶつかり合い、時に暴力や争いごともありましたが、科学技術の本格的な進歩が始まりました。

さて、日本では2005年7月に「文字・活字文化振興法」が施行され、10月27日が「文字・活字文化の日」と定められました。活版印刷はどのように出来たのでしょうか？

スクリーンに映し出された写真は、修道士たちが本を手書きしているところが描かれています。ペンは鳥の羽や草で作られ、本の材料は羊皮紙が用いられていました。イラストのように見える部分も実は文字で、字体が幾つもあることが見てとれました。敦煌の経典は活版ではなく、絵も文字も彫ってある木版でした。日本最古の印刷は8世紀(奈良時代)です。九州国立博物館所蔵「百万塔」の写真がスクリーンに映し出されました。当時は善い行いが自分の将来を良くすると信じられており、木版を使って経典を量産して流通させました。江戸時代になると、本をつくっている人たちの姿が浮世絵に多く描かれるようになりました。版木を彫る人や絵師など、様々な職人は本づくりにかかっていました。日本では、木版の上に墨を塗り、紙を乗せて刷りました。刷る行為は、いわゆる印刷とは工程が異なります。韓国も日本も鋳型を固めた砂に押し込み、液体金属を流し込むことで文字の活版ができるという道具を使っていました。ハングル語は文字数が少ないですが、日本語は文字が豊富ですので活版印刷に向かず、木版は使われ続けました。

さて、海外に話は戻ります。グーテンベルクの写真を見ながらお話を聴きました。大量生産できる方法が求められた時代、本を読みたい人が増えたルネッサンス期は、一冊の本をつくるのにかかる費用は莫大で、聖書の場合、家が一軒建てられるぐらいと言われていました。金細工師だったグーテンベルクは、活版印刷技術を発明した偉大な発明家ですが、実は不運の人でもあるのです。発明のための先行投資で多額の借金を背負うことになったうえ、当時は印刷技術などの発明を守る法律はなく、弟子に技術を持ち出されてしまい、借金の返済をできなくなりました。ここで、「四十二行聖書」の写真を紹介していただきました。ほとんどのページが42行の行組みであることからこう呼ばれています。注文に応じて挿絵を入れることもありました。グーテンベルク自身は手書きの雰囲気を残した本をつくりたかったので、活字の書体を複数用いることで、最終的に手書き風の印刷物に仕上げました。幅が揃っていて非常に美しい、つまり、非常に細かい作業だったということです。沢山つくることは出来ず、流通したのは170部ほどでした。

次にスクリーンに映し出された文字は角ばったゴシック文字で、重いスタイルの活字でした。文字の形は縦線が太く、横線が細いため、文字がつながってしまい読みにくいです。そこでイタリック体ができました。ベニスの印刷屋であるアルドゥス・マヌティウスがつくった古代ローマの本やギリシア文字の写真も見ることができました。1492年にイギリスで印刷された『黄金伝説』がベストセラーになりました。映されたページの挿絵には「諸聖人の日」が描かれています。東洋では木版印刷の隆盛が長く続き、一つずつ彫って鋳物を手作りしましたが、グーテンベルクの活版印刷でさえ、10万くらいの活字がつくられましたので、漢字の活字のハードルは依然として高かったということです。今回は活字の職人が使うノミ、ヤスリなどの道具の写真を見ることもできましたし、活字の間隔の調整が大変なこともわかりました。今はデジタルの時代ですが、現代の「フォント」は、元々は活字を入れるケースのことだったと知りました。

日本語では、何万種類もの活版から文字をつくったので、文字を組んでゆく作業は根気のいる仕事です。明治の本では、裏表印刷ができない薄い和紙に印刷し、二つ折りにした習慣が、今の原稿用紙の書式につながっています。真ん中の空白に内容の要約を書けば、半分に折ったらインデックスができるようにした工夫の歴史です。江戸時代は出版文化が盛んだったが、印刷の工程は大変でしたので一つの作品を千部ほど印刷しました。売るといよりは貸本屋に流通しました。岐阜にも現在でも活版を使用している事業所があります。長良川沿いの河原町と美濃市にある和紙専門店です。ふらっと訪ねてみられるのもよいでしょう。最後に、師範学校編纂『読書教本』や和文タイプライターの写真も紹介いただきながら、日本の活字の歴史を味わい、東洋と西洋の印刷技術の違いを学ぶことができました。

【講座の様子】

